

# 算命学中庸

## 【初年】 10回目

10回目の授業はこのページからです。

授業科目           【干支歴 かんしれき】

【初年】 10回目 【干支歴】 01

古代中国において「六十干支<sup>ろくじゅうかんし</sup>」と呼ばれている六十個の干支をつかって暦<sup>こよみ</sup>【干支歴 かんしれき】をつくりました。

〔たとえば〕 2013 年（平成 25 年）4 月 4 日 生まれの宿命は……

日	月	年
干	干	干
支	支	支
⋮	⋮	⋮
庚	丙	癸
子	辰	巳

宿命（1）2013-04-04 生まれ

2013 年（平 25 年）4 月 4 日に生まれた人を「干支暦」をつかって宿命をだすと、左記の三千支（年干支・月干支・日干支）になります。

ねん  
年は「癸巳 きすいのみ」の 年（きすいのみどし）です。

つき  
月は「丙辰 へいかのたつ」の 月（へいかのたつづき）です。

ひ  
日は「庚子 こうきんのね」の 日（こうきんのねすい）です。

2013年（平成25年）という 年 を「干支」であらわすと……

2013年 は「癸巳 きすいのみ」の 年 です。

4月 を干支であらわすと「丙辰 へいかのたつ」の 月 です。

4日 を干支であらわすと「庚子 こうきんのね」の 日 です。

♪ つぎのように読みます。

私たちは枠内の読み方を用います

ねん  
年 は（きすいのみどし）

または（きすいのみどし）

つき  
月 は（へいかのたつづき）

または（へいかのたつづき）

ひ  
日 は（こうきんのねすい）

または（こうきんのねすい）

⇒ 誰でも、生年月日の「年 月 日」をもっています。

2013年（平成25年）4月4日を例にすると、4月4日という1日は、4月という1ヶ月のなかの一部だと思っているわけです。（世間一般的な考え方では）

そして、平成25年4月4日は、平成25年という一年間のなかにある一部だと考える人がほとんどだと思います。

しかし、算命学はそのようには考えないのです。

4月のなかの4日という日は、4月という月の一部ではなく、同時に4日という日は、2013年（平成25年）という一年間の一部でもないと考えています。

それはどういうことなのかといいますと、

「年・月・日は、お互いに独立しており、価値は対等である」  
年・月・日というのは、お互いに独立している存在であり、  
こ こ べつべつ個々別々の時間の単位である。という考え方です  
つまり、お互いが独立していて〔一日はひと月の一部ではない〕  
べつべつの時間の流れであるとしています。

〔たとえば〕2006年（平成18年）12月3日 生まれの宿命は……

日	月	年
干	干	干
支	支	支
⋮	⋮	⋮
丙	己	丙
寅	亥	戌

宿命（2）2006-12-03 生まれ

「干支歴」をつかって、上記の生年月日に  
生まれた人の宿命をだすと、左記の三干支  
になります。

ど は戌の質、土性を意味します。

年の干支「年干支」は「丙戌 へいかのいぬど」です。

月の干支「月干支」は「己亥 きどのいすい」です。

日の干支「日干支」は「丙寅 へいかのとらぼく」です。

⇒ 2006年（平成18年）12月3日

❖ 2006年（平成18年）は「丙戌 へいかのいぬ」<sup>とし</sup>年です。

「丙戌」という干支は、<sup>ねん</sup>年<sup>かんし</sup>の干支になります。

年の干支を年干支（ねんかんし）といいます。

❖ 12月の干支は「己亥 きどのい」<sup>づき</sup>月です。ここが<sup>つき</sup>月です。

月の干支を月干支（げっかんし）といいます。

❖ 3日の干支は「丙寅 へいかのとら」<sup>び</sup>日です。

日の干支を日干支（にっかんし）といいます。

「<sup>かんしれき</sup>干支歴」は、その<sup>とし</sup>年の<sup>ねん</sup>年<sup>つき</sup>月<sup>ひ</sup>日を「干支」で、<sup>よ</sup>読み  
<sup>と</sup>解けるように、すべて表示されています。

それらの「干支」は、いずれも前回の授業「六十干支」  
に表記されている60種類の干支で書かれています。

⇒ 占いをする前に、知っておいて頂きたい考え方があり  
ます。

2006年（平成18年）を干支で表せば：

「丙戌」<sup>とし</sup>年（へいかのいぬ）<sup>とし</sup>どしです。

12月は「己亥」<sup>づき</sup>月（きどのい）<sup>づき</sup>づきです。

3日は「丙寅」<sup>び</sup>日（へいかのとら）<sup>び</sup>びです。

2006年（平成18年）12月3日に生まれた人を「干支」で表わすと、**宿命（2）2006-12-3 生まれ**の宿命になります。

「年・月・日は、お互いに独立しており、価値は対等である」  
3頁にこのように書きましたが、このことはご理解できますでしょうか？

あるいは、つぎのようにいえば、おわかりになりますでしょうか——？

さてそこで、1日と、1年を、<sup>たと</sup>例えにして考えますと、  
1日という時間の単位が、1年より短いのは単なる偶然<sup>ぐうぜん</sup>だと、算命学では考えています。

現実には、1年は365日ですから、当然1日より1年のほうが長いわけです。ところが——、

「1日よりも、1年のほうが、長くなければならない」  
という理由は、<sup>どこ</sup>何処にもないと考えています。

〔1日〕と〔1年〕について、あらためて考えて頂きたいのですけど——〔1日〕とか〔1年〕とかを誰が決めたのでしょうか？

1日というのは、1日の長さですが、それはどのように

して決まったのかといえ、それは自然界のうごきです。  
そうしますと、1日は24時間というのは、なにを起因<sup>きいん</sup>にして、1日と決めたのかといえ、地球の自転周期です。

太陽が東から昇って、西に沈んで、また東から昇れば、丸1日が経過したことになります。地球の自転周期です。

「地球が自分で一回転している」その長さが1日です。

日 ⇒ 地球の自<sup>じてんしゅうき</sup>転周期

日<sup>ひ</sup>というのは、地球の自転周期を表す時間の単位です。  
地球が自分で1回自転をする、その長さを1日と決めて  
いるわけです。

それゆえに「1日の長さはこれだけですよ」というのは  
人間が勝手に決めたことではないはずです。

たまたま地球が“この位”の時間をかけて一回転するもの  
ですから、1日がこの位という長さになっていますけど、  
人間が地球を回転させて、1日を“この位の長さ”  
にすると決めたのではありません。

☞ それでは、1年の長さは、どうやって決まったのでしょうか——それは地球の公転周期です。

地球が太陽の周りを、365日かけて一周しています。

それが1年という単位ですから、1年の長さも人間が決めたことではありません。

これも自然の法則であり、自然界に始めから存在していた事象です。

年 ⇒ 地球の公転周期こうてんしゅうき

地球が太陽のまわりを一周するあいだに、たまたま地球の自転速度のほうが速くて、365回自転してしまうために、1年が365日になっているだけです。

☞ 宇宙には、公転周期よりも、自転周期のほうが長い、という星はいくつもあるそうです。

金星は太陽のまわりを一周するのに、225日かかっているそうです。金星が自分で1回自転するのに243日かかるということです。

もしも金星人がいて暦こよみをつくれば、1年よりも、1日のほうが長いことになるのでしょうか——どうでしょう。

月は地球のまわりを一周するのに、約30日かかります。

月は自分が1回転するのに約30日かかるわけです。

〔たとえば〕月面<sup>げつめん</sup>では、太陽が朝、東から昇って、西に沈んで、また東から昇るまでに30日かかります。

人類が月に誕生していたと仮定すれば、人間の暦は1日が30日になっていたのでしょうか——どうでしょう。

☞ そうしますと：

〔1日〕と〔1年〕というのは、個々別々の時間<sup>ここべつべつ</sup>の単位であるわけです。

1日というのは、1年の1部ではないわけです。

お互い独立した存在です。

年・月・日というのは、まったくべつの時間の流れをあらわす時間の単位なのです。

年・月・日は、いずれも独立していて、その存在価値は対等です。



## ⇒ 季節の分類と月の周期<sup>つき</sup>

年・月・日 の 月は ⇒ 季節の分類

### 月の周期

(十二支) のところで勉強しましたが、季節の分類と月の周期を基にして、1年が12ヶ月という単位に決まりました。これも自然の法則のひとつです。

月が30日かけて、地球の周りを一周している〔ひと月の長さ〕という単位も、1日や1年とは別に独立した単位です。

かりに……月が地球のまわりを一周するのに10年かかるとしたら、1ヶ月は30日ではなくて、10年の長さになっていたでしょう。

あるいは、自然界の成り立ちで……。

春が10年続いて、夏が10年続いて、秋が10年続いて、冬が10年続いてと、そのようなサイクルで自然界が移り変わるような地球であれば、1ヶ月のほうが、1年より長くなったはずです。

☞ 地球上においては、1年間よりも、一ヶ月間のほうが短くて、一ヶ月間よりも1日のほうが短いわけですが、たまたま、このようになっているだけのことであって、もともとは、まったく異なる時間の流れをあらわす単位です。

ゆえに「存在価値も対等」ということになります。

1日は短いから、価値が低いということにはならないわけです。1日も、年、月、とおなじ価値存在なのです。

☞ 占いをするうえでも、1日ちがってしまおうと、まったく異なる宿命になります。似たような宿命ということではないのです。すべてに違う宿命になってしまいます。

そうしますと、いままでご説明したことからして、算命学では、時刻をつかうことはできません。

**算命学は、時刻はつかうことはできません**

占いに時刻を用いることはできないと考えています。

年と月と日はつかいますが、何時なんじに生まれたという時刻を用いることはできません。

時刻はまったく価値がないものと考えています。

それはですね——時刻というのは、自然の法則ではないからです。

**時刻 ⇒ 自然の法則ではない**

時刻は人間がつくったものです。

1日を24時間としていますが、人間が勝手に、都合よいとして、決めた時間の単位です。

1日を10個に分けて、1日を10時間としてもよかったともいえるでしょうが、私たちは1日を24時間と決めてつかっているだけです。

〔1時間〕という時間の単位は人間が決めた時間の長さで、自然の法則ではないのです。それゆえに……

〔1日24時間〕という単位も自然の法則ではないのです。

☞ 〔年・月・日〕この三本の柱は自然の法則です。

先ほどご説明しましたように、いずれも自然の法則をあらわす時間の単位です。

地球が太陽のまわりを一周するのが〔1年間〕です。

〔1年間〕という長さも人間が決めたものではありません。

〔1年が12ヶ月〕という単位は、季節の分類と月の周期をもとにして決まった自然の法則のひとつです。

〔一日〕は地球が1回自転する長さです。

人間が決めた長さの単位ではありません。

自然界には、1時間<sup>た</sup>経てば火星が一周するとか、2時間経過すると金星が一周するとか、そのような自然の法則は<sup>どこ</sup>何処にもないのです。

1時間<sup>ごと</sup>毎に、あるいは、2時間<sup>ごと</sup>毎に<sup>か</sup>替わる自然界の周期というのは存在しないはずです。

それゆえに、算命学は時刻をつかいません。

時刻を用いても意味がないのです。

☞ この占いは「時刻の干支をつかいますから、より<sup>くわ</sup>詳しく占うことができます」とおっしゃる方もいます。

もし、時刻の干支を用いるというのであれば、<sup>ぶん</sup>分の干支をつかわなければおかしいですよ。

〔何分に生まれた〕〔何秒に生まれた〕そこまで「干支」をつかって行くべきでしょう。

時間  
分  
秒

} これらの自然の法則は存在しません

なぜかといえば、時間は人間が決めたものだからです。

☞ もう一つ大切な注意事項があります。

「実際に生まれた生年月日でない場合は、用いてはいけません」  
生年月日をつかうのは、もともと、人間は自然物である  
という考え方が根底にあるゆえです。

実際にその人がこの世に生まれた日というのはその人が  
自然界から「気」を授<sup>さず</sup>かった日です。  
その日に流動している「気」を大宇宙から与えられたこ  
とで、自然界の一員となった日です。

そして、皆様は〔実際に生まれたその日〕から、人生が  
はじまります。

それゆえに、実際に生まれた日でないと、用いても意味  
がないのです。

☞ 12月の終りの時期に誕生すると〔1月1日〕の日に生まれたことにして届けてしまったとか、そのようなこともあるかと思いますが、それはつかえません。

占うときは、実際にその人が生まれた〔日〕でなければダメですよ。

ご自分の生まれた生年月日が、まったくわからないという人も、たまにいらっしゃいます。

すでにご両親もお亡くなりになっているとか、さまざまな事情で、〔自分が生まれた日ではないことだけは確からしい〕ということもあるわけです。

そこで……ある程度わかっているということであれば、〔たとえば〕十二月の暮れの20何日から30日迄のあいだとか、ある程度わかっているならば、それに近い範囲の宿命を全部出して観ます。

そして実際にその人が歩んで来た人生の事象に一番近いものを選択します。

というようにして、見つけていくこともできます。

☞ 夫の生年月日が不明だとしても――。

〔たとえば〕 その夫の妻とか、長男とか、次男の宿命から夫の運勢がどうなるのか……ということを割り出していくのです。

長男の宿命から、父親の運がどうなるのか、今年は父の運がいい年だとか、悪い年だとか、というのを出せるわけです。

そして次男の宿命からも、おなじように出していくわけです。

まわりの人たちの生年月日がわかれば、その人物の運勢がわかります。ご自分の生年月日が全くわからない人は、そのようにして占っていくようになります。

☞ **実際の「生年月日」と、戸籍の生年月日が異なる人は、実際に生まれたときの生年月日を確認なさっておいてください。**

☞ あるいは、宿命を出すときに……アメリカ人だとか、ヨーロッパ人だとか、外国の人という場合もあります。

アメリカで生まれた人は、アメリカで生まれたその日の生年月日をつかえば問題はありません。

日本とアメリカを〔例え〕にすれば、日本ではもう夜は明けているけど、アメリカはまだ前日の夜です。

そのような場合は、宿命は1日違いますが、その国の日にちで出せばよいのです。

あるいは、夜中の12時頃に生まれて、医師はその時刻を〔23時55分〕と記録したけれど、母親にいわせると〔24時を過ぎていた〕そういう場合もあるわけです。

医師と母とでは、生れた時間が違ったことになります。

そういう場合は、2種類しかないので、両方の宿命を出します。それらの宿命を観て、自分の性格・生き方を当て嵌めて見るとわかります。

☞ 自然界は、1年・ひと月・1日毎ごとに、規則正しいごきを繰り返しています。年・月・日は自然界に存在している時間の流れです。それゆえに、その人が実際に生まれた生年月日から割り出した「干支」を、その人の宿命として、さまざまな事象を占ってゆくのです。

【初年】 10回目 【干支歴】 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】 11回目【宿命と自然】